

限界原理にもとづく労働価値説

マルクスの基本定理を正当なものと理論的に主張するためには、労働が他の生産要素と違って人間が自然に投入可能な唯一の本源的要素であること、その主体的な投入行動が一種の最適化行動として行われていることを示さねばならないが、本報告はそのことを数理モデルとして示す。また、このモデルでは、労働投入の最適化行動で重要なのが生産性に関するパラメーターや時間の希少性であることも示す。ただし、ここで使用する生産関数は通常、限界原理に基づいて労働に関する収穫逓減を仮定しなければならないが、これは別種の問題を引き起こす。労働価値説の想定と矛盾する「価値」と「投下労働」との比例性の問題が想定しにくくなるからである。そのため、本報告では生産手段の使用が重要性を増した産業革命以降の状況がそうした比例性の確保にとって非常に重要な役割を持っていることも同時に解明する。労働価値説が通用する状況を本報告では「労働価値説的状況」と名付けるが、それは①市場取引の一般化、②労働の不熟練化とともに、この③「価値」と「投下労働」との比例性が重要であることを本報告で主張することとなる。